

ガラテヤ書4章23節 「自由の女から生まれた子」

1A 二人の女の息子

1B 律法の下にいる女奴隷の子

1C 自分の行い

2C 隠せない恥

2B 恵みの下にいる自由の女の子

1C 不可能を可能にする神

2C 神の約束によるいのち

2A 二つのエルサレム

1B 地上のエルサレム

1C 地から天に行く試み

2C 実を結ばない行い

2B 上にあるエルサレム

1C 天から地に來られた恵み

2C 恵みの賜物

3B 不妊の女の多産

本文

ガラテヤ人への手紙 4 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、4 章の前半、11 節まで見ました。午後に、後半 12 節から最後、31 節まで一節ずつ読んでいきます。今朝は、26 節を中心にしてお話しします。「しかし、上にあるエルサレムは自由の女であり、私たちの母です。」パウロは、4 章の後半で、信仰によって生きる人々と、律法の下で生きようとしている人々の対比を、アブラハムの生涯から見ていきます。これまでも、アブラハムに対する約束に基づいて、信仰によって生きることを教えていましたね。再び、アブラハムの話に戻ります。

アブラハムの生涯はしばしば、「信仰のポートレート(portrait)」とか、「恵みのポートレート」と呼ばれます。ポートレートという言葉を検索すれば、写真の被写体のことを意味すると出てきますね。元々の意味は肖像画です。アブラハムの生涯を見ていくと、まるで絵画で目に見えるように、信仰というものが、恵みというものが描かれていくという意味で使っています。信仰によって生きる人々の、生きた証しですね。ですから、創世記 12 章からの彼の生涯を辿っていくことは、「信仰」という言葉だけでは抽象的で分かりにくいことも、具体的になり、分かりやすくなります。

1A 二人の女の息子

そこでパウロは、アブラハムの二人の息子を 4 章で取り上げます。女奴隷ハガルから生まれた

イシュマエルと、妻サラから生まれたイサクです。ハガルから生まれたイシュマエルが、いかに、律法の下で生きる人々を表しているかが分かります。肉によって生まれた時の力で、神に認められようとする人々をよく表しています。イサクが、神が約束されて、自分たちの力を超えて、神が私たちを御霊で生んでくださったことを表しています。

1B 律法の下にいる女奴隷の子

アブラハムの生涯は、妻の紹介から始まります。創世記 11 章 30 節で、「サライは不妊の女で、彼女には子がなかった。」と始まるのです。しかし、12 章では「12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなる者とする。」と神は約束されています。不妊の女であるのに、大いなる国民になるとの約束が与えられました。

アブラハムは、彼女が子を産むことをもちろん期待したでしょう。彼は、甥のロトを救出した後に、主から報いがあると語られました。15 章です。けれども、「15:2 私は子がいないまで死のうとしています。私の家の相続人は、ダマスコのエリエゼルなのでしょうか。」と尋ねました。ところが、主は夜空を見せて、「15:5 あなたの子孫は、このようになる。」と約束されたのです。そして彼は主を信頼しました。すると、その信仰が彼の義と認められた、とあります。

しかし、16 章に入りますと、妻のサライは、子が産めないで、私の女奴隷のところにお入りください、と、夫に要求しています。いわゆる当時の、代理母です。法的に、サラの子にはなるのですが、血はつながりません。そこで生まれたのは、イシュマエルです。これで安泰だと思いましたが、いやいや、ハガルが自分の子が生まれたことで、女主人サラを見下すようになり、お家騒動が起きました。それが、アブラハムが 86 歳の時です。

ところが、その 13 年後、つまりイシュマエルが 13 歳になった時に、主が再び現れました。イシュマエルではなく、サラから生まれる子が、アブラハムへの約束を受け継ぐのだと主は告げられました。息子が 13 歳になると、イスラエルではバル・ミツパという成人式を祝います。13 歳になると大人としてみなすのですが、ですからアブラハムがもうこれで安泰だと思っていたところで、主は、それを、きっぱりと、否定されたのです！

そして 99 歳になりました。その時に、三人の旅人が来て、アブラハムがもてなしたところ、その一人が、言いました。「18:10 わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには男の子が生まれています。」サラは、その人のうしろの、天幕の入り口で聞いていたのですが、心の中で笑いました。そこで主が言われました。「18:14 主にとって不可能なことがあるか。」果たして、アブラハムが百歳、サラが九十歳の時にイサクが生まれたのです。その名は、「笑う」です。彼をその名で呼ぶたびに、私たちが、「まさか、百歳と九十歳の老夫婦に子どもなどできないのに。」と言って笑うほど、神はご自分の力を現わしてくださり、約束を実現してくだ

さる方であることを知るので。

この後で、イサクの乳離れの祝いをしますが、イシュマエルは幼いイサクをからかいます。それでサラは、ハガルとイシュマエルを家から追い出してくださいとアブラハムに言います。彼は心が痛みましたが、それは主のみこころであることを知り、その通りにしました。そして、イサクが育って、もう成人になっていたであろう頃、モリヤ山でイサクを全焼のいけにえとして献げなさいと命じますが、その時の言葉がこうです。「22:2 あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。」もうここでは、イシュマエルのことは眼中になく、主は、イサクを「ひとり子」と呼び、イシュマエルは退けられているのです。

1C 自分の行い

この、アブラハムの生涯から、パウロは、律法の下で生きる人と、御霊によって生まれて生きる人との違いを教えています。律法の下で生きるとは、自分が生まれた時に持っている力によって、神の基準に達しようとする試みだということです。肉によって生きると言ってもよいでしょう。サラは不妊で、けれども神がアブラハムから子孫が生まれると約束されているので、女奴隷によって息子を得ようとしていました。そうやって、肉の力によって神の義に到達しようとする試みです。それに対して、恵みの下に生きるとは何でしょうか？主が約束されたことを信じることです。そして、その約束されたことは、神が行われることを信じることです。そして、神が天からの贈り物のように、その約束されたことを実現してくださることを信じることです。

みなさんが、ご自分の軸足をどちらに置いているか、ぜひ確かめてください。「自分は、きちんとクリスチャンとしてできていない。」とかいうことが、いつも中心にあったならば、それは律法の下に生きています。自分自身の行いばかりに目を留めているならば、言い換えるならば、自分の内に何か力があるかのようにみなしているのです。そのような見方をしているならば、偽教師が来て、「このようにやっていったら、あなたは良いクリスチャンになれます。」ということを知り、そこに事細かい規則が入り込んでくるのです。そして、罪意識をそれで償うことができると思うのです。罰を受けないように、真面目に生きていきます。同じことをしているようでも、動機が誤っています。

2C 隠せない恥

そして、肉による行いは、一見、しっかりやっているように見えて、肉の行いが現れ、必ずその内実が現れてしまいます。イシュマエルが生まれて、それで神の約束が実現したかのように見えますが、その後でハガルは高慢になり、サラは怒り、お家騒動になってしまいました。ガラテヤの諸教会に行ったら、おそらく見た目は、とても良く出来ている、しっかりとしたクリスチャンたちが集まっているように見えるでしょう。けれども、内情は多くの争いがあったのです。「5:15 気をつけなさい。互いに、かみついたり、食い合ったりしているなら、互いの間で滅ぼされてしまいます。」

何か自分の行いで覆い隠そうとしても、その恥は隠れるものではありません。アダムが罪を犯した時のことを思い出してください。アダムとエバは、いちじくの木の子葉で覆い隠しましたが、それでも主が園の中を歩いて来られたら、彼らは恐ろしくなり、身を隠したのです。これが、行いによる救いの始まりです。行いによって義と認められようとするのは、罪の結果であることが分かります。

2B 恵みの下にいる自由の女の子

しかし、アブラハムは、肉によって完成させようとする過ちを犯しましたが、その後、信じました。約束を信じているので、そこには自由があります。自分が何とかしなければいけないという束縛から、解放されているのです。

1C 不可能を可能にする神

先ほど話しましたように、サラが、旅人の一人の言った言葉を信じませんでした。来年の今頃、男の子が生まれるという言葉も信じませんでした。そこで主が、「主にとって不可能なことがあるか。」と言われたのです。無いものを有るもののようにして呼び出す方なのです。これは、神がキリストにあって行われた恵みを表しています。つまり、死んでいるのに神はキリストをよみがえらせました。そのことを信じる者が、義と認められるのです。「ロマ 4:23-24 しかし、「彼には、それが義と認められた」と書かれたのは、ただ彼のためだけでなく、²⁴ 私たちのためでもあります。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、義と認められるのです。」

2C 神の約束によるいのち

そして、イサクが生まれました。神の約束にしたがって、命が与えられました。アブラハムも、サラも、子を生むような生殖機能は当の昔になくなっていました。どちらも更年期を迎えていました。それなのに、命が与えられたのです。

これは何を指し示しているのでしょうか？神の御霊による新生です。胎が死んだも同然の女の子が与えられました。同じように、罪において死んでいる私たちを、神は、ご自分の霊によって新たに生まれさせてくださいました。そして、神の子どもとしてくださったのです。アブラハムからイサクが神によって生まれたように、私たちは、御霊によって新たに生まれ、神の子どもとなりました。イエス様のことを思い出してください。マリアは不妊どころか、処女であり、子を宿すのは完全に不可能でした。それでも神の聖霊によってマリアは身ごもったのです。同じように、私たちが死んでいたのに、御霊によって新たに生まれ、神の子どもとなったのです。

2A 二つのエルサレム

パウロは、4章において、さらに、女奴隷ハガルの子イシュマエルと、自由の女サラの子イサクの違いを、地にあるエルサレムと、天にあるエルサレムの違いで説明しています。地上にあるエルサレムは、律法の下にあって、女奴隷ハガルのようになっている。けれども、自由の女サラは、天

のエルサレムにあるのだ、ということです。

1B 地上のエルサレム

主は、ダビデにエルサレムを永遠の都にすることを約束されました。けれども、エルサレムで行われているのは、律法による儀式が盛んに行われていますが、その本質が見失われていました。イエス様が宮清めを行われたところからも、良く分かると思います。

しかし、聖書には、神は天におられて、そこに都があることを教えています。「詩 46:1-5 神はわれらの避け所また力。苦しむときそこにある強き助け。2 それゆえわれらは恐れない。たとえ地が変わり山々が揺れ海のただ中に移るとも。3 たとえその水が立ち騒ぎ泡立ってもその水かさが増し山々が揺れ動いても。セラ 4 川がある。その豊かな流れは神の都を喜ばせる。いと高き方のおられるその聖なる所を。5 神はそのただ中におられその都は揺るがない。神は朝明けまでにこれを助けられる。」山々が揺れても、水かさが増しても、それでも全く害を受けない、全く揺るがない都があります。

ヘブル人への手紙 11 章では、アブラハム、イサク、ヤコブの求めていた故郷とは、天にある都だと言っています。「11:16 しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。」黙示録 21-22 章に、それが天から降りてくる都、天のエルサレムであることが明らかにされています。

1C 地から天に行く試み

律法の行いによって、神に義と認められるということは、いわば、地上にいながらにして天に這い上がろうとする試みです。ちょうど、バベルの塔が、天に届く塔を建てることを目標としていましたが、同じように、地に属している者が天に属することを試みることであって、土台無理な話です。アダムが罪を犯して以来、土地から出るものは茨とあざみであると主が言われたように、地からは呪いは生まれても、祝福は生まれなくなりました。祝福、良き賜物はあくまでも、天から与えられるのです。

イエス様がニコデモに言われました。「ヨハ 3:13 だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。」地から天に上った者はいないのです。しかし、天から下って来た方はおられます。イエス・キリストです。地上から這い上がることはできないのですが、天から降りて来ることはおできになります。だから、私たちはこの方を信じて、この方からの良き賜物を期待して、信じて受け入れていくのです。ところが、いつの間にか、天から受け取るのではなく、地上のもので天を求めて行こうとしてしまいます。

2C 実を結ばない行い

地上のエルサレムに、イエス様が入城されました。宮清めを行われました。そして、エルサレムの外で、いちじくの木がありました。そこは、葉は生い茂っていましたが、実がありませんでした。イエス様は、それを呪われました。(マルコ 11:12-14 など)それは、彼らが多くの儀式を行っていて、神に対して礼拝を献げているのですが、神を礼拝していることによる実が結ばれていなかったのです。断食をしたり、いけにえを献げているけれども、争いをしたり、貧しい人を虐げたり、不正を行っていました。実が結ばれていなかったのです。

2B 上にあるエルサレム

1C 天から地に来られた恵み

私たちは、キリスト者の生活を道徳的に求めてはいけません。道徳的というのは、自分の中に何か良いものがあって、それを引き出して自分を良くして行こうというものではない、ということです。道徳ではなく、超自然的に求めるのです。なぜなら地上には良きものはないからです。良きものは、天から来ます。先に、私たちは御霊によって新たに生まれることを話しました。「ヨハ 3:3 まことに、まことに、あなたに言います。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」イエス様による、この、ニコデモに対する言葉は、「上から生まれなければ」と訳すことのできる言葉です。上から、天から生まれたのです。神から生まれるとは、上から生まれること、天に御座から生まれている、ということなのです。

2C 恵みの賜物

ですから、すべてが恵みです。すべて良いとされているものは、神から来ているのです。「ヤコブ 1:17a すべての良い贈り物、またすべての完全な賜物は、上からのものであり、光を造られた父から下って来るのです。」自分にはできないことを、神は命令されています。たとえば敵を愛することです。できないことを神は知っておられて命令するのです。だからこそ、これは自分ができるかどうか、ではなく、神を信じて、その良き賜物を受け取るのです。信仰によって受け取り、信仰によって従います。

私たちはそこで、自分たちの知恵がいかに良いように見えても、争い、妬みなど、いろいろな悪い実が結ばれます。それは地から出ているものだからです。けれども、天からの知恵は違います。「ヤコブ 3:14-17 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦々しいねたみや利己的な思いがあるなら、自慢したり、真理に逆らって偽ったりするのはやめなさい。15 そのような知恵は上から来たものではなく、地上のもの、肉的で悪魔的なものです。16 ねたみや利己的な思いのあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがあるからです。17 しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善もありません。」地と、天との違いがあります。

3B 不妊の女の多産

そして、この信仰の歩みは、遅々として進んでいないように見えます。ちょうど、アブラハムに子が与えられなかったように、長いこと結果が見えないことがあります。肉によって動いた方が、はるかに即自的な結果ができます。それで、私たちはすぐに見える結果に引き寄せられてしまいます。けれども、違うのです。信仰によることこそが、後に多くの実を結びます。パウロは、ガラテヤ 4 章 27 節で、イザヤの預言から引用しています。「子を産まない不妊の女よ、喜び歌え。産みの苦しみを知らない女よ、喜び叫べ。夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもよりも多いからだ。」夫に捨てられた女の子どもとは、不妊のサラのことです。けれども、不妊の女の方が結局は、多くの子どもを生むことになります。

私たちは、ですからしっかりとイエス様に信頼して歩いていく必要があります。主が、行われると信じていくのです。そして、言われたことをしっかりと行っています。主がその実を増やしてください。天からの恵みなのだということ、自分の世界ではなく、天の御国なのだということを忘れないようにしてください。